

第33回 人と海のフォトコンテスト 「マリナーズ・アイ」展 総評

審査員 小松健一

今展の審査を担当したのは、今回で29回目となった僕と3回目となる新進気鋭の写真家・塩崎亨さんである。東京・六本木で1日目は午前10時から始まり、午後6時30分で第一次審査は500点程残して終わった。2日目も10時から始まり、前日残った第一次審査分を終えて、二次審査に入った。二次審査を終え約200作品余りが残ったのは午後1時前であった。会場でお弁当を食べた後、第三次審査、入賞・入選120作品が決定した。そして四次審査で入賞候補作品が約40作品に絞られ、最終審査となる第五次審査において大賞、推薦、特選、優秀賞、会長賞、特別賞の17作品と入選作品103点が厳正な審査の結果決定した。午後3時を回っていた。

その後、審査員と主催者とで今展の結果についての分析や問題点、今後の対策などについて一時間半余り討議を行った。

第33回展の最大の特徴は、第32回展と比べると応募者（80.2%）、応募作品数（78.5%）、応募作品枚数（80%）と激減したことである。応募者は223人、応募作品は878作品、応募作品枚数は924枚減った。全体的に前年比20%以上減ったということである。

僕は数日前にこの結果を知らされ、あまりの衝撃に眠れぬ日々を過ごした。三十三年間、積み上げてきたのは何だったのか。志半ばで亡くなった26年間審査員を務めた丹野章さんをはじめ、平野貞邦さん、松木田義人さんたちの顔が幾度となく思い浮かんだのだ。

ここ四回は、いずれも応募者数は全て1,000人を大きく上回っており、応募作品枚数も4,000点を超えていた。一気に二割強消えてしまった要因は一体何なのだろうか。詳しく分析して対策を講じなければ、この傾向はさらに深刻な事態を生むと思った。それで審査の後、緊急に会議を設けてもらったのである。

2020年の第31回展の時に、新型コロナウイルスの感染拡大がはじまり、昨年（2019年）の第32回展には全国に感染は蔓延し、政府は「緊急事態宣言」をくり返し発生させ、写真業界をはじめとしてあらゆる業界に大打撃を与えたのである。加えて、写真界、写真業界をとりまく信じがたいような激変があった。しかしである。そうした厳しい逆風の中にあっても着実に応募者、応募作品数について伸ばし、昨年（2019年）の第32回展には、すべてにわたって史上最高記録を樹立しているのである。

また、11年前の甚大な被害を出した東日本大震災が発生した2011年、第22回展の折も前年と比べると大きく減らしている。東北地方へ発送した応募要項などの手

紙の大半が受取人不明で戻り、被災地、宮城県などは応募者が1/30までに減ってしまったような状況下でも応募者数は13%減だが、応募作品数や応募枚数は9%未満にとどまっているのだ。今回の減り方が尋常ではないことがわかるだろう。

事務局によれば、今展に向けて、いままで実施してきたことはすべて行ってきたと言う。コロナ感染や写真業界の深刻さも本年も続いているが、それだけが要因とは思えない。応募者や応募状況を見てもほとんど変化がなく例年通りだ。第32回展から横浜、神戸、博多の三会場すべてで、全入賞・入選作品を一堂に展示することになったし、今展はさらに、「海の写真道場」とも言うべき僕の作品解説を神戸では二日間、横浜、博多で一日実施すると言う積極的な応募者へのサービスも打っていた。

にも関わらず激減しているのは何が要因だろうか。審査後の対策会議でわかったことの一つは、応募要項に「応募作品は返却いたしません」の一行を入れたことが唯一いままでとは異なることであった。この事を知らされた僕は危惧を抱き反対したが、主催者の所思あつての決定には従うしかなかった。

僕が一番危惧したのは、応募者（作者）が心を込めて苦勞し、いわば命がけで作した作品（著作物）を作者自身が返却を希望し、送料まで用意しているものを廃棄してしまうということである。審査員、主催者の作品、応募者に対する姿勢が問われるからである。

しかし、この一件がすべての要因とは決めつけられないことも確かである。他にも一夜にしてこれ程までに激減してしまう何か要因はあるのだろうか。それを早急に突き止め、問題を解決する努力をしなければならぬことが今後最大の急務である。

と同時に来年度以降を展望して新たな課題、抜本的な対策も打っていく必要があるだろう。大きな荷を背負わされた責任をひしひしと感じるのだった。

多くを割いて今展の問題点について書いてきたが、これもマリナーズ・アイ展の一つの歴史。しっかりと記録しておくことが重要と思い記述した。

さて、第33回展の応募者は944人、応募作品数3,247点、応募作品枚数は3,695枚であった。20%超減ったとは言え、コンテストの応募としては堂々とした数字である。

第35回展、そして第40回展に向けて大きな目標と展望を持って取り組みを強化していく決意である。

31都道府県で応募者が減っているが、逆に、埼玉、石川、大阪、和歌山、岡山など13府県で伸びているのも注目したい。力作も生まれている。

入賞者17人の中に16歳、22歳、31歳、39歳とこれからのマリナーズ・アイ展を牽引していく世代が入ったことは期待したい。

先の会議の中で、若い世代、特に20歳未満の高校生たちなどの応募を促進し、奨励・育成する意味を込めて10代からの応募作品のグランプリに賞を創設してほしいと提案した。主催者は前向きに検討してくれることになった。期待したい。

今展の応募の中に高校生たちが学校の写真部ぐるみで応募してきていた事例がいくつか見られたことから、さらにこの分野に目を向けていきたいと思っている。

外国からの応募も今回三人おり、日本に在住している外国人が初めて入賞した。この点も注目すべきでさらに外国人に門戸を広げたい。

女性の応募は少しずつ増えているとはいえ、いまだ17.2%。男性の82.4%と比較するとまだまだ少ない。当面女性の応募者を30%まで伸ばし、将来50%にするのが目標である。そうなれば、「マリナーズ・アイ」展が質・量ともに大きく変革することであろう。楽しみである。

この「総評」を書いている途中に、「マリナーズ・アイ」展事務局から電話があり、検討した結果、来年度、第34回展の作品募集から「作品の返却を受け付けて希望者には作品を返却することが決まりました」と言ううれしいニュースが飛び込んできた。詳しいことは「応募要項」等に記されると思うが、何はともあれ、みなさんの大切な作品をお返しできるようになったことはうれしい限りである。

最後に、横浜会場、福岡会場、神戸会場の三会場で作品解説「海の写真道場」（無料・自由参加）を開催します（同封チラシ参照）。写真展と併せて友人・知人をお誘いの上、ぜひご来場、ご参加ください。みなさんにお逢いできることを心待ちにしています。

合掌

2022年 風待月